

ユダヤ教のリタージェー（典礼）¹

ジョナサン・マゴネット
小林 洋一（訳）

訳者による序

ここに、ユダヤ教改革派ラビ、ジョナサン・マゴネット (Jonathan Magonet) 教授から、ユダヤ教のリタージェー（典礼）についての講演を頂けることを感謝します。マゴネット先生は、聖書学が専門ですが、ユダヤ教の祈禱書の編者でもあられ、ユダヤ教のリタージェーについて、造詣の深い方です。先日、先生が編纂に加わった最新の祈禱書²を1冊頂きましたが、それを介しても、ユダヤ教改革派がいかに関心を持っているかを再確認させられました。

祈禱書を重んじるということは、礼拝が式文によって進められるということで、その意味でも、ユダヤ教改革派の礼拝においては、典礼的な側面が強いということが分ります。頂いた祈禱書の言葉は、ヘブライ語、英語、そしてヘブライ語の音写つきになっており、たとえヘブライ文字が読めなくとも、そのラテン文字を音読することで、共に唱和できるようになっています。ヘブライ語を十分に理解しない礼拝者にもまごつきを与えないようにとの、配慮からだと思えます。

ご自身がユダヤ教のリタージェーに生きておられるその道の専門家から、じかに話を伺えることは日本にあってはまれなことであり、その意味でもマゴネット先生に、心からの感謝を申し上げたいと思えます。

1 <訳注> これは、西南学院大学博物館（ドージャー記念館）での神学部のロングチャペル（2010.6.28）で語られたものである。原題は、*Jewish Liturgy*。

2 <訳注> *דבר התפלות סדר: Forms of Prayer* (London: the Movement for Reform Judaism, 2009).

資料(1)

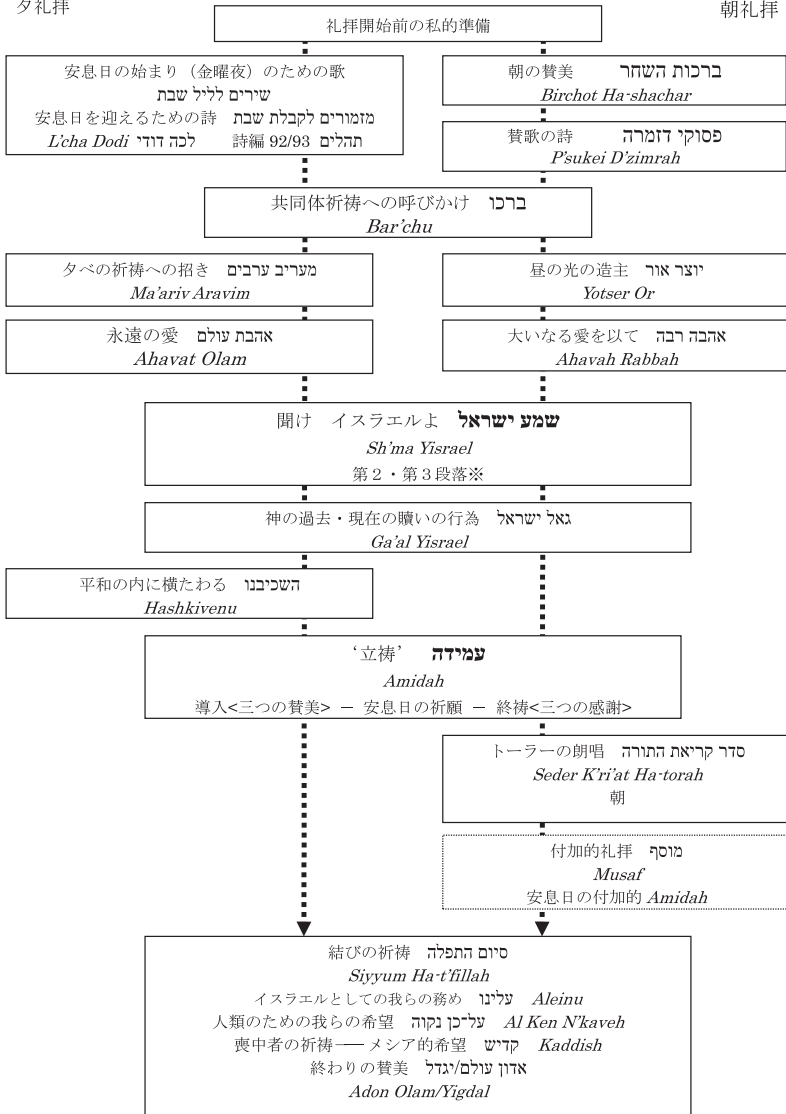
ערבית

夕礼拝

安息日礼拝の構成

שחרית

朝礼拝



סדר התפלות: *Forms of Prayer* (London: The Movement for Reform Judaism, 2009), 745.

※申6:4-9 (第1段落), 申11:13-21 (第2段落), 民15:37-41 (第3段落)

講演に先立ち、最初に資料について説明をいたします。資料(1)「安息日の礼拝の構成」は、安息日における、礼拝の流れを図式化したものです。これは、ユダヤ教改革派の祈祷書の中におさめられているものに和訳を付したものです。

今回の講演の主要部分は、この図の解説の形をとっていきます。またこの講演のあとで、ユダヤ教の礼拝の先唱者（ハザン、カントール）の賛美をCDで聞きますが、資料(2)は、その先唱者の紹介、及び詠唱詞です。

講 演

ヘブライ語聖書には、〈各自が唱える〉個人的祈りと、集団的リタージュカル（典礼的）な祈りの、両方が出てきます。後者は、最も顕著な仕方では、神殿礼拝と、それに関連する詩編に出てきます。しかし、今日、私たちがユダヤ教のリタージュとして同定するもののルーツは、バビロンにおける最初の離散（exile）⁴の中に見いだされると思われます。そこにおいて人々は、自らの独自のアイデンティティを維持する一端として、共に集い、学び、そして祈ったと思われます。そして多分、リタージュカルな祈りは、バビロンからの帰還者の影響により、第二神殿での犠牲祭儀と共に、そこでの礼拝の一部に組み込まれたと思われます。例えば、その礼拝の中で、「シェマア」(Shema)⁵（「聞け、イスラエルよ。…」申6：4-9⁶）と、十戒が朗唱されたことを私たちは知っています。その後、第二神殿崩壊によってこの犠牲祭儀制度が終焉を迎えたとき、そこにはすでに、それに代わる礼拝制度⁷が成立していました。

3 〈訳注〉〈 〉は訳者の補足を示す。

4 〈訳注〉バビロン捕囚のこと。紀元70年のローマによる神殿崩壊後の exile が第二の「離散」となる。

5 〈訳注〉「シェマア」はヘブライ語で「聞け」の意。申命記6章4節の初めの言葉として出てくる。「シェマア」は、ユダヤ教の中心的信仰告白とされる。

6 〈訳注〉特に断らない限り、本書での聖書の引用は『聖書 新共同訳』（日本聖書協会、1993）による。

7 〈訳注〉シナゴークでの礼拝を指す。

かつての神殿における犠牲礼拝は、「アヴォダ」⁸(*avodah*)、すなわち、文字通りに「礼拝」(*service*)、と呼ばれていました。しかし、現代のラビたちは、それに代えて、彼らが「祈り」の定義とする「アヴォダ シェ・バ・レブ」(*avodah shebalev*)、「心の中にある礼拝」を強調します。これについては、すでにヘブライ語聖書の中でも、預言者たちが犠牲の目的について言及しており、不正の行いを継続したままでも犠牲を捧げさえすれば、神を宥めることができると考える人々への糾弾がなされていました(イザ1:12-15)。犠牲は捧げるが、行ないは改めない。この種の懸念は、ラビの時代⁹にまで引き継がれました。ラビたちの理解は、罪の告白、引き起こした過ちの償い、そして心からの悔改めこそが必要な第一段階であり、動物犠牲は、大方すでに完成しているプロセスの最後の証印にすぎないというものでした。しかし、〈神殿崩壊により〉動物犠牲の不在が余儀なくされたことは、贖いのためのさらなる、あるいは何か他の、証印となる方法を探し出す必要が生じたことを意味しました。

ラバン¹⁰・ヨハナン・ベン・ザッカイは、かつて神殿崩壊後のエルサレムの近くを、その弟子ラビ・ヨシユアと歩いていた。ラビ・ヨシユアは、神殿崩壊の遺跡を見て言った。「我々にとって、何ということか! 動物犠牲の儀式によるイスラエルの人々の罪を贖う場所が破壊されたままだ!」と。その時、ラバン・ヨハナン・ベン・ザッカイは、彼に、次のような慰めの言葉を語った。「わが子よ、悲しんではならない。たとえ神殿が減んでも、贖いを得る他の方法がある。我々は、今や慈しみの行為を通して贖いを得なければならない。」何故ならば次のように書かれている。「私が望むものは慈しみであって、犠牲ではない」(ホセ6:6)

8 <訳注>ヘブライ語のカタカナ表記は、日本語としてすでに定着しているもの以外は、アクセントによる長音や長母音を無視している。

9 <訳注>タルムードの時代(紀元3-7世紀)のこと。

10 <訳注>「ラバン」はアラム語で「我らの師」を意味する。ヒレルの子孫で、サンヘドリン(最高法院)の議長になった者に与えられた尊称。

と¹¹。(Avot d'Rabbi Natan=「ラビ・ナタンによる父祖たち」〈4：5〉¹²)

このような事態の中にあって、ユダヤ教における日毎のリタジーの作成にあたっては、二つの異なる要素が結合することになりました。まず、第一の要素は、シェマア（「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である…」申6：4-9）、すなわち、神の唯一性の確認の言明です。そこには、「これらの言葉」が、「寝る前と目覚める時に」¹³繰り返し唱えられることへの要求が含まれています。ここに、朝と夕のリタジーとしての礼拝の実践が起り、そこではシェマアの言葉が公式に朗唱されることになりました。これが第一です。

第二の要素は、犠牲祭儀そのものに由来します。すなわち、いつの日にか、犠牲祭儀を回復したい、という望みに基づくものでした。そこでラビたちは、かつて神殿での日々の犠牲が捧げられたその同じ時刻〈朝方と午後〉に、公に唱えられるべき祈りの中に、神殿での犠牲祭儀の回復を求める祈りを制定しました。この新しい祈りは、いくつかの名前で呼ばれています。起立して唱えられるために、「アミダ」(Amidah)「立祷」と呼ばれるか、「十八祈祷」¹⁴(後代には発展して祈りの数は18に19が付加される¹⁵)としても知られています。この祈りは、それにさらに決定的な意味を持たせるために、「ハ・テフィラ」(ha-tefillah)、「the prayer」とも呼ばれています。ところで、制定されたこの祈りについては、神殿では夕方の犠牲祭儀はなかったため、アミダがシェマアと同様に、夕方にも唱えられるべきかどうかが問題となりました。結果として（これは典型的なラビ的妥協なのですが）、この祈り、アミ

11 〈訳注〉このホセア6：6の章句は英文訳。

12 〈訳注〉タルムードの「アヴォート」(「父祖たち」)編つきの知恵の小篇。長窪専三翻訳監修『タルムード ネズィキーンの巻—アヴォート篇 小篇アボート・デ・ラビ・ナタン—』(株式会社三貴, 1994), 28頁参照。

13 〈訳注〉新共同訳では「寝ているときも起きているときも」(申6：7)と訳出されている。

14 〈訳注〉ヘブライ語で「18」を意味する「シェモネ・エスレ」とも呼ばれる。

15 〈訳注〉祈りの数は19となったが、依然として18を意味する「シェモネ・エスレ」の名で呼ばれる。

ダは、朝と午後の礼拝でのシエマアのように、礼拝の先導者が繰り返して公式に朗唱すべきものではなく¹⁶、夕礼拝においては〈会衆によって〉沈黙のうちに読まれる私的な祈りの一つに含めることで解決を見ました。これに加えて、かつての神殿祭儀の慣行では、安息日と祝祭日には〈特に〉「付加的」な犠牲が捧げられたのですが、〈それに対しては〉その時刻に合わせて、それに相応しく改定されたアマダが朗唱されることで解決をみました。

ところで、リタージーがどのように発展してきたのかは正確には分かっていません。しかし、その主要な構成要素について論じたものは、紀元2世紀の終わり頃のミシュナー¹⁷の中ですでに現れています。それによりますと、初期ラビ時代には、個人的祈りの全体的構造とテーマは徐々に定式化されていきますが、必要な言葉の変更については、〈礼拝の司会を司る〉祈りの先導者に任されていました。これに続く世紀において、世界の様々な地域のユダヤ人共同体は、各々に独自のやり方を発展させました。ラブ・アムラムによるセデル (the Seder Rav Amram)¹⁸ は、様々な祈りの式順と内容を完璧に叙述した最初の〈祈祷〉書です。「セデル」は「式次第」を意味し、祈りの式順を示します。このラブ・アムラムのセデルは、元々は、礼拝の式次第についてのユダヤ教共同体からの質問に対する「回答状」(レスポンス)として、紀元9世紀にバビロニアのスラにあるラビ学校の学頭であったアムラム・ガオン¹⁹によって書かれたものです。

しかし中世を通して、礼拝の中心のかつ、公的部分が確立する中で、個々の信仰共同体が、そのセデルにさらなる資料を付け加えるということをしました。後に印刷機の発明、及び標準化されたテキストの入手が容易になることにより、ユダヤ教の礼拝形式は、ほぼ確立されました。そして19世紀における改革派運動の始まりと相まって、礼拝の内容と、それが執り行われる際

16 〈訳注〉アマダは、まず会衆によって沈黙のうちに読まれ、それが済んだ後で、礼拝の指導者(ハザン)が声を出してそれを繰り返し、それをもって公式の朗誦とした。

17 〈訳注〉ユダヤ法の集大成されたもので、ユダヤ法の基本となっているもの。

18 〈訳注〉現存する最古のユダヤ教の祈祷書(860年頃)。

19 〈訳注〉「ガオン」はラビ学校(学塾)の長の称号。

の形式の双方において刷新がなされました。後でまたこの件に戻りますが、今は、このようにして成立していった礼拝を構成する主要素と、それを支えるいくつかの理念について見ていきたいと思えます。

王の宮殿を通過して行く旅²⁰

礼拝の公的部分は、祈りの先導者による「共同体祈祷への呼びかけ」(*Bar'chu*)²¹によって始まります。付随的なことではありますが、祈りの先導者は、正統派の伝統では、ユダヤ人の男性であれば誰でもなれます。改革派の伝統の場合には男女共なれます。ラビである必要はありません。しかし、実際には、しばしば、この任のために音楽的賜物によって選ばれ、その専門職として採用された「先唱者」「ハザン」(*chazzan*)によって導かれます。

公的礼拝を行なうための必要条件として、正統派の伝統では、13歳以上の男性10人の出席、「ミンヤン」(*minyan*)が必要とされますが、改革派では、この必要条件を拡大して、女性を含む場合と、この必要条件を全く考慮しない場合とがあります。正統派では、「ミンヤン」の出席人数は、特定の祈りを唱えるための必要条件にもなっています。例えば、近親者を亡くした者が、喪中の日々「カデシュ」(*Kaddish*)の祈りを唱えることは宗教的務めなのですが²²、それは「ミンヤン」の出席のもとでなされなければなりません。この故に、そのような状況の中にあっては、人々は、お互いを支え合うという責任感から、「ミンヤン」の確保を目指して儀式に出席するように努めます。

次に、礼拝の公的部分の前になされる、朝礼拝にも、説明が必要な二つの主要な部分があります。元々、これらの部分は、しばしば家庭で、公的礼拝への備えとしてなされた私的なメディテーション（瞑想）や、個々に朗唱さ

20 <訳注> この項に関しては、参考資料(1)の「安息日礼拝の構成」に即して講演が進められている。

21 <訳注> *Bar'chu* におけるアポストロフィは無音シェバを示す。

22 例えば、最初の7日間 (*shiv'ah*) は喪中の家で、毎夕男性10人が揃い次第、カデシュが唱えられる。

れた賛美²³や、詩編によって成り立っていました。しかし、数世紀の間に、これらの個人的部分はシナゴグに移動し、公式化され、信仰共同体によって共に朗唱され、あるいは、少なくとも、祈りの先導者によって、礼拝の初めの部分で唱えられるようになりました。このプロセスは二つの部分に分かれます。最初の部分は、〈𐤀〉「朝の賛美」「ビルホト ハ・シャハル」(*birchot ha-shachar*)と呼ばれます。これらは、肉体的・霊的に、毎朝新しい命に目覚めることについての非常に個人的な賛美です。第二の部分は、〈𐤀〉「賛歌の詩」「ピシュケ デ・ジムラ」(*p'sukei d'zimrah*)と呼ばれ、個人的であるよりは、集団的性質のもので、次に来る公的部分の礼拝に備える神賛美の章句〈の朗唱〉からなっています。

さて、次の公的礼拝ですが、これは、ある意味で、「神である王の宮殿を表敬訪問するもの」として理解することが可能です。このことは、〈𐤀〉「立禱」(アミダ)の構造の中に最もよく見ることができます。それは、三つの導入的賛美と三つの終禱の感謝——季節によって少し変化がありますが、ほぼ一定しているもの——から成り立っています。この初めの賛美と終わりの感謝の間の中に位置する神への祈願として、13の祈願がきます。しかしながらこれは、安息日と祝祭日には、これらの中心的13の祈願が、特定の日や祝祭日に唱えられる一つまたはそれ以上の祈願に差し替えられます。この〈王の宮殿を訪問するという〉イメージは、すでにタルムードの中に見られるものです。

ラビ・ハナニヤは言った。「最初の三つの賛美では、我々はその主人を称えている僕ようである。真中の祈願においては、礼拝者はその主人からの贈り物を求めている僕ようである。最後の感謝においては、彼はその主人から贈り物をもらい暇を請い、そこを去る僕ようである。
Berachot 34a=「祝禱34a」

23 <訳注> Blessingsは「祝福」,「祝禱」,「讃めたたえ」等に訳されるが、文脈により、「賛美」,「感謝」,「祈り」等に訳し分けている。

ところで、先に述べた「十八祈祷」〈アマダ〉の最初〈第1項目「歴史の神」²⁴⁾は次のように始まります。

讃むべきかな、あなたは、主、わたしたちの神、わたしたちの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、偉大なる、強力なる、恐るべき神、最高の神、慈愛において寛大なる、全ての創造者、私たちの父祖の良い行いを覚えられ、その御名の故に、彼ら〈父祖〉の子どもたちの子どもたちに愛において贖い人をもたらす方。讃むべきかな、王、助け主、救主、盾なる方、あなたこそ、アブラハムの盾なる方²⁵⁾。

この最初の部分は、神についての多様な経験を反映する様々な聖書のフレーズ（成句）から成っています。よく知られているように、三人の父祖たち、アブラハム、イサク、ヤコブは、神とユダヤ人の民との間の特別な関係の始まりを代表しています。「偉大なる、強力なる、畏るべき神」のフレーズは、申命記(10:17)や、他の箇所に出てきます。「いと高き神」(*El Elyon*)は、アブラハムの、メルキゼデクとの出会いに基づく文言です(創14:18, 20)。「儀礼」(protocol)という観点で言えば、それは、神に、私たちとの永き関係をよりよく思い起こさせる、私たちの自己紹介です(日本での名刺を差し出す習わしは、これによくマッチします)。

第二の項目(「力強き神」²⁶⁾)は、死者の復活を強調しつつ、私たちの命と死に関しての神の力について語ります。

主よ、あなたはとこしえに勇者であられます。あなたは死者を生かされます。あなたは力強く助けてくださいます。あなたは風を吹かせ、雨を降らせ給います。憐れみをもって生ける者を養い給います。あなたは大いなる憐憫をもって死者を生かし、病人を癒し、悩める者を助け、倒

24 〈訳注〉項目名「歴史の神」は סדר התפלות: *Forms of Prayer*, 75 による。

25 〈訳注〉塚本虎二『主の祈りの研究』(聖書知識社, 1983), 121 参照。

26 〈訳注〉項目名「力強き神」は סדר התפלות: *Forms of Prayer*, 75 による。

れる者を支え、囚われ人を解き放ち、あなたの誠実を塵の中に眠る者に守り給います。誰が偉業の完成者であるあなたのような者でありましょうか。誰が、殺し、また生かし、また救を芽生えしめ給うあなたに等しき者でありましょうか。あなたは誠実であって死者を生かし給います。讃むべきかな、あなた、主、死者を生かし給う者！²⁷

ここには、神殿祭儀と関係していたサドカイ派と、当時勃興しつつあったファリサイ派運動——将来のラビ的指導者はここから出てくる——との間に存在した古代の議論の反響が見られます。前者は死者の復活という考えを受け入れませんでした。それ故に、この賛美を朗唱することが出来ませんでした。このことは、リタージーが、特定の共同体の信仰と実践の体系を規定することに関係するときには、〈その集団の持つある種の〉政治的な側面が不可避的に出てくるということです。その点で、リタージーは仲間の包括を企てると共に、そうでない者を排除する機能をも果たします。しかしながら、いづれにしても、「儀礼」という点で言えば、この賛美は、私たちの存在に対する神の究極的力を確認する祈りなのです。

第三の項目（「聖なる神」²⁸）は、神の「聖」について語ります。

聖なるかなあなた、御名は聖くあります。聖者達は日毎にあなたを称えましょう！セラ。讃むべきかな、あなた、主、聖なる神！²⁹

ここで中心的となっているものは、イザヤ書6章3節「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。」です。イザヤの物語において、これは天使によって歌われているものですが、私たちは、これを朗唱することにより、ここ地上で、天の宮廷を印象深く模倣する仕方です。

27 <訳注> 塚本虎二『主の祈りの研究』、121-122頁（但し、「エホバ」を「主」に変更している。以下同じ）。講演ではなかった十八祈祷の直接引用を、必要に応じて塚本訳を用いて補っている。

28 <訳注> 項目名「聖なる神」は סדר התפלות: *Forms of Prayer*, 76 による。

29 <訳注> 塚本虎二『主の祈りの研究』、122頁。

る私たちの賛美を歌います。ここでは、「聖」と訳されている単語が特別な意味をもっていることを覚えることが重要です。ヘブライ語の「カドシュ」(kadosh) は「分離」, 「違い」を意味するため、この節における三重の繰り返しの言葉は、神の「他者性」, すなわち、神学用語の「超越性」を強調します。しかしながら、6章3節で「聖」の後に出てくる「主の栄光」の「栄光」と訳されているヘブライ語は「カボド」(kavod) です。これは「重さ」という意味から派生した言葉ですが、全世界は「重さ」, すなわち、神の「臨在」で充滿している、というのです。再び、神学用語で表せば、それは、神の「内在」を意味します。それ故に、この節は、神の「遠隔性」と「臨在性」の同時性、または「他者性」と「親密性」の同時性という逆説を表します。儀礼的観点から言えば、これは、そのような大いなる神に対して、私たちは卑しき祈願者であり、祈願はできても自分の意志を神に強要することなど決してできない存在であることを暗に示唆しているようにも思えます。

さて、王なる神と共にあることで必要とされている儀礼を尽くした後で、会衆は、今や自らの祈願を自由に差し出す者となります。中心的な13の祈願の順序は、いくつかに分類することが可能です。まず、一つの解釈に従えば、最初の三つは個人の霊的なニード（理解、悔改め、霊的癒し）を映し出すものです。次の三つは、私たちの物質的なニード（自由、健康、暮らし）を映し出すものです。第七番目にくるもの〈正式には10項目〉は、離散者 (exiles) の集合を求めるものです。その後にくる第三の六つは、民族間の橋渡しとして、回復されたユダヤ民族の霊的ニード（正義、悪しき者の裁き、義人の報い）と、民族の物質的ニード（エルサレムの再建、メシア的支配者の到来、祈りが聞かれるようにとの祈り）を述べます。

さて、これらの中でも、最初の方の祈願〈第四項目「理解のための祈り」〉は、多くの仕方において、神と命に対してのユダヤ的アプローチを規定する知識及び理解と密接に関わっており、大変重要ですので、以下に引用します。

あなたは、人に知識を恵まれ、死ぬべき運命の者に理解を教えられました。どうか、私たちに、あなたからくる知識、理解、洞察を恵んでください。讃むべきかな、あなたは、私たちに知識を給う神。

知識があるが故に、神との間の距離についての気づきが私たちに生じます。それ故に、これに続く祈願、第五項目「立ち帰りの祈り」は「テシュヴァ」(*teshuvah*) についての願いです。

わたしたちの父よ、わたしたちをあなたの律法に還らせてください。
わたしたちの王よ、わたしたちをしてあなたに近く仕えさせ、全き悔改めをもって、あなたの御前に帰らせてください。讃むべきかな、あなた、主、悔改めを喜び給う者！³⁰

「テシュヴァ」はユダヤ教の中心的概念の一つです。通常は「悔改め」と訳されますが、このヘブライ語は「回る」、「回転する」、「引き返す」、「帰る」を意味する「シュウヴ」(*shuv*) という単語に基づき、神と私たちの関係の回復を求めるものです。それ故に、神から私たちを引き離すものを知った後で、神が恵み深く、寛大に赦す方であるが故に、私たちの様々な悪しき行ないに対する赦しの懇願が、祈願の最初のグループの三番目にくるのは筋の通ったことでもあります³¹。

さて、これらの13の祈願に続いて、最後の三つの祈願は、王の前から暇乞いをする儀礼の一部です。伝統的ヴァージョンでは、第一〈17項目〉が神殿犠牲の回復を願うものです。

主、わたしたちの神よ、あなたの民イスラエルを寵愛し、その祈りに眼をとめ、ふたたびあなたの家の至聖所に於いてあなたの犠牲を捧げさせてください。イスラエルの燔祭と、その祈りと、礼拝とを、速やかに愛と寵愛を以て受けいれ、あなたの民イスラエルの捧げる犠牲を常に寵愛を以てうけ、わたしたちをあわれんでください。願わくはわたしたちの眼に、あなたが昔の日のように、憐憫をもってあなたの住居なるシオ

30 <訳注> 塚本虎二『主の祈りの研究』, 122 頁。

31 <訳注> 十八祈祷にあつては、この「赦しの祈り」は6項目となる。

ンに帰り給うのを見させてください。讃むべきかな、あなた、主、速やかにあなたのセキナ（栄光）をシオンに帰らせ給う者！³²

第二〈18項目〉は、神が私たちに下さった全てのことに対する感謝の表明です。

主、わたしたちの神よ、あなたに感謝します。あなたはわたしたちの先祖の神、永遠より永遠にいたるまで、わたしたちの生命の磐、わたしたちの福祉の楯であります。あなたに感謝します。わたしたちの生命と靈魂との故に、あなたを讃美します。（わたしたちの生命はあなたの御手にあります、わたしたちの靈魂はあなたに委ねられています。）また常に、夕も、朝も、正午も行いたもうあなたの徴と、あなたの奇蹟と、あなたの恩恵の業の故に。最も恵み深き者、なぜならあなたの憐憫は限りがありません。最も憐れみある者、あなたの恩恵は絶えることがありません。すべての生きている者はあなたの大いなる御名を称えます。なぜなら神は恵み深く、最も恵み深いお方だからです。讃むべきかな、あなた、主よ、あなたの御名は常に最も恵み深く、あなたに感謝するのは佳いことだからです！³³

第三〈19項目〉は、誰かとの別れにおける、祝福の言葉としての「平安」の願いとなっています。





平安と、幸福と、祝福と、恩恵と、愛と、憐憫とをわたしたちに、またイスラエルの民に与えてください。主、わたしたちの神よ、わたしたちを悉くあなたの御顔の光をもって祝してください。なぜなら主、わたしたちの神よ、あなたはあなたの御顔の光によって教訓（トラー）と、生命と、愛と、恩恵と、憐憫と、平安と、祝福と、慈愛とを与え給うた

32 〈訳注〉塚本虎二『主の祈りの研究』、127頁。

33 〈訳注〉塚本虎二『主の祈りの研究』、127-128頁。

からです。あなたの民イスラエルを多くの力と平安とを以て祝するのは
佳いことです。讃むべきかな、あなた、主、その民イスラエルを平安を
以て祝し給う者！アーメン！³⁴

ところで、ユダヤ教のリタージュにおいては、トーラーの巻物は、安息日
と祝祭日の当日、またラビの時代では、市場が開かれる月曜と木曜の朝に、
会堂の聖櫃から取り出され、その週の章句〈聖書日課〉が朗唱され、それ
についての学びがなされました。この儀式は、シナイ山での啓示〈トーラー〉
授与を再現するものです。しかし、これは、王の宮殿のイメージから言えば、
出席者に対して、あるいは自発的な祈願³⁵に対する王からの応答を意味して
います。

さて、ユダヤ教における礼拝〈様式〉の核心を概観したことで、今や、そ
の〈核心〉に近づき、それを完成させる諸段階を見る準備ができました。礼
拝者は、イメージにおいて、王と会うための宮殿の様々な部屋と、控えの間、
ロビーを通って行きます。これらの「部屋」とは、実際には、礼拝のもう一
つの重要なポイントであるシェマアの朗唱へと、さらにはそれを越えて導か
れていくための一連の賛美〈の比喻〉です。〈〉「共同体祈祷への呼びか
け」の後にくる最初の、そのような賛美は、〈〉「昼の光の造り主」（朝拝
版）と、夕をもたらす方〈〉「夕べの祈祷への招き」（夕拝版）である神を
称えるものです。二つ共に、その祈りの用語において——特にその朝拝版に
おいてそうですが——普遍的（ユニバーサル）であることは意義のあること
です。あたかも宮殿の最初の「部屋」が、あるゆる人々、及び全自然界に開
かれた共用の出会いの場であるかのように受け取れるからです。ラビたちは、
ここ〈〉「昼の光の造り主」〉でのオープニングのフレーズに、イザヤ書45
章7節aを用いています。バビロン捕囚中のイザヤは、多分、彼の時代の宗
教的二元主義と闘っていたのでしょう。それを伺わせるように、彼は神につ
いて次のように語ります。

34 〈訳注〉塚本虎二『主の祈りの研究』、128頁。

35 〈訳注〉この「祈願」は、典礼化されていない自発的な祈願の意。

45：7 光を造り，闇を創造し 平和をもたらし，災いを創造する者。…

しかしながら，この章句がリタジーで引用される場合には，終わりの言葉の「災い」は，³⁶ 神との親密な祈りにとって，より受入れやすいより中立的な言葉である「全て」〈を創造する〉に代えられています。

次に，第二の賛美〈☒：朝版「大いなる愛を以て」，夕版「永遠の愛」〉は，イスラエル，すなわち，ユダヤの民に対する神の特別な愛にその焦点をしばっています。それは明らかに次にくるシェマア〈「聞け，イスラエルよ」〉へと導くためにそこに置かれたものです。朝拝版の最後の言葉は，その直後に唱えるシェマアを直接的に示唆しています。

あなたは全ての民と言語の中から私たちを選ばれ，あなたに感謝し，あなたの唯一性を宣言し，あなたの御名を愛するようにと，私たちの王，あなたの大いなる御名に引き寄せられました。讃むべきかな，愛において，その民，イスラエルを選ばれたあなたこそ，神。

そして，これは，直接的に神の唯一性の断言（「聞け，イスラエルよ。我らの神，主は唯一の主である」）と，神を愛するようにとの呼びかけを伴う，シェマアの言葉〈申命記〉に導きます。

6：5 あなたは心を尽くし，魂を尽くし，力を尽くして，あなたの神，主を愛しなさい。

ユダヤ教のリタジーにおいては，二つの付随する章句（申11：13-21；民15：37-41）と共に，シェマアを朗唱することで，会衆者のイスラエルとしてのアイデンティティとその務めが確認されます。これをラビの言葉で言えば，シェマアの最初の項目を朗唱することで，私たちは「オル マルクト

³⁶ 〈訳注〉イザヤ 45：7a の「災い」(evil) は，ヘブライ語では7節 a の最後に出てくる。

シャマイム」(‘*ol malkhut shamayim*)「天の王国の^{くびき}軛」を引き受けることを表明していることになります。

このように整えられて、私たちは第三の「部屋」、すなわち、エジプトからの脱出において葦の海を渡る際の、かつての神の救いの行為を思い起す賛美〈☒「神の過去・現在の贖いの行為」〉へと入っていきます。それは神の永遠性、唯一性、ユダヤの民との特別な関係についての確かな断言を含むものです。それ故に、シェマアを取り巻く三つの賛美は、それぞれに「創造、啓示、贖い」を表していると解して唱えることも可能です。

アミダとトーラーの朗唱に続いて、〈☒〉「結びの祈祷」に入ります。結びの祈祷は、これまで見てきた順序を実際的には逆転させ、神とイスラエルの特別な関係から、人類全てに対する普遍的希望へと動いていきます。そのことは、「アレヌ」(*Aleinu*)〈☒「イスラエルとしての我らの務め」〉の祈りにおける二つのパラグラフにおいて表されています。最初のパラグラフは、この世界において神を証しするというイスラエルの務めを強調します。


全ての支配者なる方を称え、私たちに、そのトーラー（教え）を与えることにおいて全ての民の中から私たちを選ばれた創造主なるお方の偉大さを認めることは私たちの努めです。

続けて、その第二パラグラフは、全ての人類が神に立ち返るという希望を表明します。そのような仕方では、神は、私たちを、礼拝からこの後すぐに立ち戻ることになる、外の世界へと導き出されます。

それ故に、主、私たちの神、私たちは、あなたがこの世界から偶像を除き去られ、そして偽りの神々が滅ぼされることで、あなたの力ある栄光をいち早く見るようにと、あなたに望みをおきます。

この「結びの祈祷」において、会衆は「カデシュ」〈☒「喪中者」の祈祷——メシア的希望〉を朗唱します。この言葉は、神の「聖」を祝うもので、

語根「カドシュ」(*kadosh*) から派生した言葉です。「カデシュ」の様々な翻案 (*versions*) は、礼拝全体を通じて現れます。それらは各々の段階の終わりであることを示す、「頌栄」、すなわち、神賛美として効果があります。しかし、カデシュは、伝統的には、礼拝の終わりに、近親者を亡くした遺族によって朗唱される祈りとしても用いられてきました。

礼拝は、讚美歌、特に、神の超越性と内在性の両方を、単純なリズムにのせて祝う「アドン オラム」(*adon olam*) 「世界の主」〈終わりの賛美〉の朗唱によって閉じられるのが一般的です。

アドン オラム³⁷

アドン 永遠なる神、全て形あるものの創造を前に独り支配された方、その望みによって全てが始まり、主権者と宣言された方。

全てのものが終わりとなる後も、畏れの中で、独り永遠に支配される方、かつて今も、そしてとこしえまでもおられ、その栄光は決して変わることはない。

唯一なる方、比類なき方、かつてこれからも、傍らに立つ者なく、独り、力と威力の源なる方。

これこそ私の神、私の命を救われる方、深い絶望の中で私がつかむ岩、私が振る旗、私の隠れ場、私が叫ぶとき私の杯を共にされる方。

私は、私の魂を私の造り主の手の中にゆだねる。私が寝ているときも、起きているときも、私の神は、私の魂と私の体の近くにおられる。私は恐れない。

37 〈訳注〉「アドン オラム」は講演では引用されなかった。これは、 סדר התפלות: *Forms of Prayer*, 320 にある英語訳の拙訳である。

この「終りの賛美」には、文字通り何百というメロディーがありますが、そのいずれかの一つが用いられます。

礼拝の式次第とテキストは定式化されていますが、テキストが読まれ、朗唱され、あるいは歌われる、そのやり方については、ユダヤ教内の異なる伝統間にあつては、驚くほど多くの違いが存在します。しかしながら、ヨーロッパにおける解放³⁸以来、近代において、その有様には、急進的な変化が見られました。19世紀にドイツで始まり、ヨーロッパ全体に広がった改革運動は、米国においては独自の発展を遂げました。人々が閉ざされた中世のユダヤ人世界で見ていたものを背後にし、より広い社会に自由に入っていくことになったとき、初期の改革者たちは自らのアイデンティティ及びその目的の意義の保持をめぐつて格闘しました。そしてそれは礼拝そのものに主要な焦点が当てられることになりました。

一般的な意味において、ユダヤ教には、二種類の礼拝形式があります。一つは多様な「正統派」の伝統に属するものです。正統派は、それまでの礼拝で受け継いできた全てを執り行うことを義務と見なします。そしてその責任を、祈りの先導者の手に委ねます。当然ながら、そのような礼拝はどうしても長くなります。そのため会衆は特別な部分にのみ参加し、それ以外は〈礼拝堂〉に出たり入ったりして、その機会を「社交」に使います。もう一つは、プロテスタントの礼拝をモデルにしたものです。礼拝は短く、秩序正しさをもって、全ての参加者が礼拝の間中、彼らの注意をリタージーに集中させる型です。

ユダヤ教の改革者たちは、19世紀のドイツにおけるシナゴークで、前者に見られる秩序立っていない正統派スタイルの礼拝を経験しました。それは、新たに解放された東ヨーロッパのユダヤ人によって西側にもたらされたものでしたが、改革者たちは、新しい社会の規範に順応したいとの願いから、いくつかの刷新を試みました。まず、教会で見出される秩序正しさを造り出すために、伴奏のためのオルガンを導入し、新しい種類の合唱によるリタージー

38 〈訳注〉ヨーロッパ諸国において、17世紀後半からユダヤ人に平等と市民権付与がなされた出来事を指す。

カルな演奏を造り上げました。さらに、それまでの性別による席を廃止して、女性をシナゴグの仕切りの背後や、二階のバルコニーに席を指定していた伝統を止め、近隣の教会をモデルに、家族ごとに座るようにしました。また延々と続く礼拝の時間を短縮し、繰り返しを取り除き、天使に関する言及のような、その時代の合理性と科学的進歩に順応しないと感じたものを〈典礼から〉排除しました。それと同時に、新しい故郷、ヨーロッパでの自由な社会の出現を見ることで、イスラエルの地への帰還願望、個人的なメシア待望、神殿再建及びそこでの犠牲祭儀の待望に関しても、それまで保持してきた、伝統的信仰に対して疑問を抱くということが起こりました。

彼らは、リタジーを日常語に翻訳し、ある部分はヘブライ語、ある部分はドイツ語で読み、ドイツ語の説教を導入しました。ラビは、しばしば「ラビ博士」と称されるように、大学や近代的なラビ養成学校の卒業生からなり、ドイツのキリスト教の牧師の装いから“借用した”黒いガウンを用いる、共同体の専門職指導者となりました。これらの全ての変化は、当然のことながら、伝統主義者からの反発にさらされ、それは次の世紀にかけて、超伝統主義から急進的改革主義のスペクトルに沿って、多様にして異なる運動（正統派、保守派、改革派、自由派、ネオログ派（Neologue）³⁹再構築派、ユダヤ教再生派、人道主義派）を生み出していくことになります。

しかし、これら全ての近代化による祝宴は、ナチスの台頭と、ホロコースト（ユダヤ人の言葉では「ショア」）と、三分の一のユダヤ人の滅亡により劇的な終焉を迎えることになります。ユダヤ人が抱擁し、自らも大きく貢献をしてきた文明そのものが、今や向きを変えて、自らを滅ぼそうとしているのを眼前にしたとき、19世紀に見られた上記のごとき楽観主義と普遍主義は、幻想、あるいは錯覚と見なされることになりました。加えて第二次世界大戦後に起ったイスラエル国家の建国は、ユダヤ人のアイデンティティの感覚に、さらなる急進的变化を及ぼしたため、この二つの事態〈ホロコーストと、イスラエル国家の建国〉は、ユダヤ教のリタジーにも影響を与えることになりました。そしてそれは、新保守主義運動の台頭により、改革派によって導


39 〈訳注〉「ネオログ」は、「新しい意味」。

入された多くの変化や削除が、果たして良かったのかどうかの再吟味を迫られることになりました。これに加えて、大戦後の世界では、伝統的なリタージーに見られる、ラビの家父長的権威に挑戦する女性運動も台頭しました。その〈結果の〉一つとして、今日、全ての非正統派のリタージーのアミダの最初の項目〈「歴史の神」〉の族長の祈りには、父祖と共に、女先祖（サラ、リベカ、ラケル、レア）のリストが含まれています。さらに、女性のライフサイクルの出来事⁴⁰を祝う新しいリタージーも出現しつつあります。

これらの変化と並んで、ユダヤ教のリタージーの創作者は、現代の宗教共同体の持つ、非常に多様な期待にも直面しなければならなくなりました。伝統的に、共同体の中では、日に三度の祈りは宗教的義務と見られていました。しかし、今日、その義務は疑問視されています。今日では、人々は、この礼拝から何を得たのか、出席したことに何か価値があったのかと、しばしば問う、ということが起こっています。ユダヤ教の礼拝に参加することは、〈種々の配慮がなされたとしても〉ある程度のヘブライ語の知識を含む、いくつかのスキルが要求されます。大抵のユダヤ人は、その種の欠けがあるため、疎外感を免れません。そのため、より新しいリタージーは、会衆が朗唱や賛美に加わるのを助けるために、ヘブライ語本文の音写をつけています。加えてリタージーの性質と目的に関しても急進的問いがなされ、多くの大きなシナゴグでは、建物の違う場所で、同じ時間帯にいくつかの異なる礼拝——伝統的なもの、改革派の修正的なもの、瞑想や個人的な分かち合いの時間を持つ創造的なものまで——が執り行われているという現実もあります。これらの全てにおいて、これまで語ってきたようなリタージーの一般的概要は維持されていますが、現実には強調されるべき部分の焦点の当て方において、非常に多様化が進んでいるのが現状です。

結論として、講演の最初に述べたことに戻りたいと思います。私が初めに申しましたように、ヘブライ語聖書には、神への自由祈祷と、定式化されたリタージュカルな形式の祈りが共に出て来ます。そこにおける自由祈祷の可能

40 〈訳注〉女性の初潮、出産、更年期等。

性は、人に生来備わった特徴であるとともに、ユダヤ人の生活の一部であり、定式化された文脈を必要とはしません。それでも、リタジーそれ自体は、そのような私的な祈りと瞑想のためのスペースを、特に、公的礼拝〈「共同体祈祷への呼びかけ」〉が始まる前の段階で提供しています。さらには、そのような時が「アミダ」の直後に設けられたりもしています。

私は、英国におけるユダヤ教改革派運動の新しい祈祷書の編纂に携わる機会が与えられたとき、自由祈祷と定式化したリタジーとの関係について考察し、それを定式化しました。それは改訂版祈祷書の中に採用されています⁴¹。皆さんの信仰共同体にとって、何か役立つ並行例があればとの思いから、参考までにここに挙げておきます。

リタジー（典礼）と祈り

リタジーは祈りをする共同体を規定する。

祈りは個々人の捧げものである。

リタジーはその共同体の価値を確認する。

祈りはそれらの価値を私たちの口と心に植えつける。

リタジーは伝統を分かち合う人々を結びつける。

祈りは祈る人全てと私たちを結びつける。

リタジーは共同体の境界線を描く。

祈りは私たちを全体として創造内に位置づける。

リタジーは祈りのための言葉を提供する。

祈りは言葉を越えて届いていく。

41 〈訳注〉 סדר התפלות: *Forms of Prayer*, 15.

リタージェーは私たちを歴史の内に留める。
祈りは私たちを未来へと開く。

リタージェーは私たちの感情を求める。
祈りは私たちの感情を洗練する。

リタージェーは私たちが知っている世界で始まる。
祈りは世界が探求されるべきことを示唆する。

リタージェーは祈るための空間を提供する。
祈りは私たちが祈る事柄の真実をテストする。

リタージェーは神をこの世界にもたらすことを求める。
祈りは私たちの生活の中に神の居場所を作る。

リタージェーは安全，継続，確かさを提供する。
祈りは邪魔し，挑戦し，対決する。

リタージェーは祈りなしには不毛となる。
祈りはリタージェーなしには自己中心となる。

リタージェーは出来事である。
祈りは一つの危険〈を犯すもの〉である。

リタージェーは限界を置く。
祈りは空間を提供する。

リタージェーは断言する。
祈りは希望を表明する。

リタジーはモーターである。

祈りは燃料である。

リタジーは乗り物である。

祈りは旅である。

リタジーは絆である。

祈りは目的地である。

資料(2)

ヨセフ・シュミット (Josef Schmidt, 1904-1942), クツエルノヴィッチ (Czernowitz) シナゴグの先唱者。ラジオや、後には映画でのオペラや、軽いポピュラー音楽でも成功をおさめた先唱者である。ナチスから逃れた彼は、スイスの強制収容所で心臓疾患の誤診によって亡くなった。

安息日の朝にシナゴグではトーラーの朗唱がなされるが、そのトーラーの巻物が「聖櫃」に戻されると、「何故なら、それはあなたにとってよいことだから」(‘*Ki Lekach tov*’) が歌われる。これはシュミットが歌うユダヤ教の伝統的詠唱ヴァージョンである。

「何故なら、それはあなたにとってよいことだから」

何故なら、わたしはあなたに良い教示を与えた。

わたしの教えを捨ててはならない。(箴言 4 : 2)

それは、それを捉える全ての人にとって命の木である。

そして、それを保つ人は幸いである。(箴言 3 : 18)

その道は喜びの道である。

そしてその全ての道は平和である。(箴言 3 : 17)

神よ、わたしたちをあなたのもとに立ち帰らせてください。わたしたちは立ち帰ります。わたしたちの日々を昔のように新たにしてください。(哀歌 5 : 21)